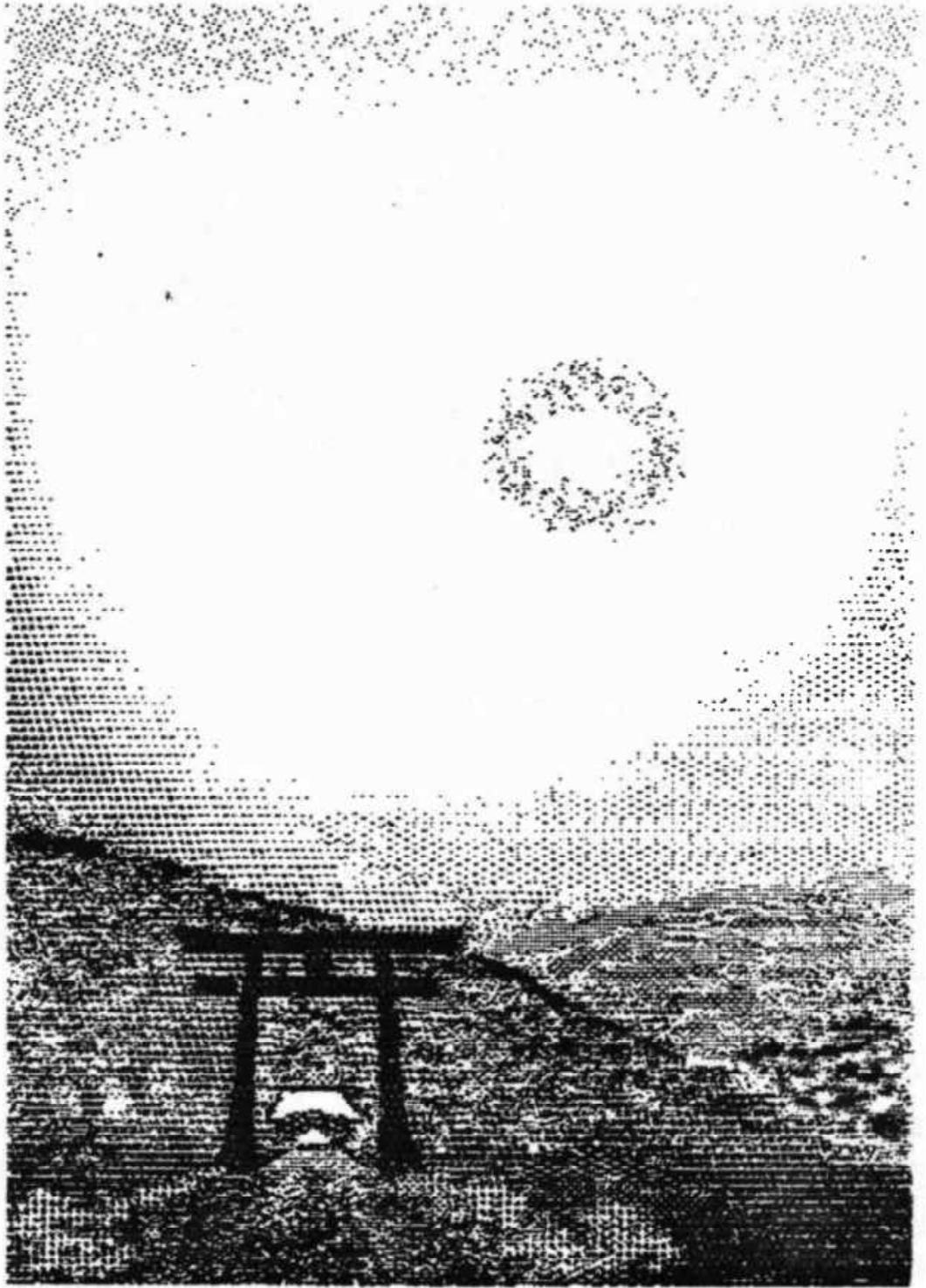




- つまりなんだな、その。深夜のドライブは「山中を一人」に限るね、ほんと。
- どしたんですか、いきなり。
- だからね、真夜中に、この、一人で車をだよ、淋しい山の中で走らせているとだね、なんちゅうか、モノ凄いの恐怖感って言うのかな、わかる？ 山の中の木々が車の上に覆いかぶさってくるような、圧迫感を感じるんだな。
- はあ、孤独感から来るんでしょうかね。
- これが何とも言えん快感なのだ。
- 変わってますね。
- いや、あのね、なにも僕は、それだけが好きというわけじゃない、わけよ。そのね、真っ暗な山道を走り続けるでしょ、それでもいつかは山も終わるわな。木々が途切れ、パッとあたりが開け、たんぼが広がる、天上からは月明りが差し込む。そのときね、何かこみあげてくるような安堵感がね、あるわけよ。なんて言うかな、それまでは車という枠の中におびえていた自分がね、急にひらけた空間の中の一点であるかのように……、おい寝るなって！
- あ、シツレイ、失礼。 で、この絵は？ （右図）
- というね（聞いてなかったろ）、感じのね、静かな安堵感を表わしたもののなんですよ。『つきのあかりはしみわたり』ってね、姫神のアルバムの中にある夜想曲なんだけどね、たぶん、こんな感じじゃないかなあ、って思っ。
- 今回もまた、あれですね、自己陶醉にどっぷりとお浸かりになって。
- あ～、いい湯だ！



第3回

つきのあかりはしみわたり